

「落ちとまり残れる」悪御達

——『源氏物語』竹河卷冒頭表現考』補遺——

高野 浩

一 はじめに

『源氏物語』竹河卷は、特殊な序文を冒頭に有する。それによれば、序文以後に語られる内容は鬚黒・玉鬘の家の女房である悪御達の語ったものであるという。悪御達という新しい語り手が、その立場を具体的に示された存在として登場している点は、他巻と比しても異質さが伴うといえるだろう。また、その解釈の難解さは広く知られるところである。特にその一連の文章の中にみられる「ひが事」の解釈をめぐる¹⁾は、さまざまな見解が提示されてきたが、いまだ定見をみない。²⁾この点については、稿者も私見を述べたことがある。その内容については後述するが、結論だけここで申し述べるならば、この巻の語り手である悪御達の側から示された、「紫のゆかり」による夕霧をはじめとする六条院家についての語りの内容に対する批判、異議申し立て、というものである。本稿では、この私見に基づき、今一度、竹河卷の冒頭表現について再考する。その際、中心的に取り上げるのは、その冒頭表現の中にみられる「落ちとまり残れる」という、語り手悪御達に関する叙述である。「落ちとまる」という表現の解釈について、従来の「生き残る」という意で妥当なのかどうかをまずは検討していく。

そのうえで、この「落ちとまる」という表現の解釈を提示しつつ、悪御達という語り手のバックグラウンドを汲み取っていく。最終的には、前稿で示した内容をうけながら、あらためて「ひが事」に関する私見について言及する。本稿は、こうした作業を行いながら、前稿の内容の補完を目指すものである。

二 「落ちとまり残れる」

次に引く竹河卷の冒頭文は『源氏物語』中でも特異なものとして知られている。

これは、源氏の御族にも離れたまへりし後大殿わたりにありける悪御達の落ちとまり残れるが問はず語りしおきたるは、紫のゆかりにも似ざめれど、かの女どもの言ひけるは、「源氏の御末々にひが事どものまじりて聞こゆるは、我よりも年の数つもりほけたりける人のひが言にや」などあやしがりける、いづれかはまことならむ。
(5)竹河・五九³⁾

前述したように、「ひが事」の解釈をめぐることは、さまざまな見解が示されており、いまだ定見を見ない。たしかにこの箇所^①の解釈は難解ではある。そうしたなかで注目しておきたいのが、傍線部「落ちとまり残れる」という、語り手悪御達の出自に関する文言である。従来、この表現を含んだ前後の箇所は次のように理解されてきた。

岩波旧大系

後々まで生き残っていた者が、人の問いもしないのに、自分から語って置いた物語であるよ

新潮古典集成

おしゃべりな女房たちで、生き永らえ残っていた者が、問わず語りに話しておいたものだが

源氏物語評釈

生き長らえ残っていたのが、問わず語りに話しておいたもので

小学館新全集

まだ生き残っていた者が問わず語りをしておいたものが

鑑賞と基礎知識

まだ生き残っていた者が、問わず語りに語ったもので^④

諸注釈書いずれもが「落ちとまり残れる」という表現を「まだ生き残っていた者」と解釈し、ほぼ共通した理解を示している。竹河の冒頭文が古注以来、解釈の揺れを生じさせながら検討されてきた中で、この「落ちとまり残れる」という箇所は、鬚黒・玉鬘家に仕える悪御達の生き残りといったかたちで理解されてきたわけだ。

しかし、この箇所の解釈についても、なお検討の余地が残されているのではないかと考える。そこで、まずはこの表現について用例を検討しておきたい。

「落ちとまる」という表現に関する用例は、『源氏物語』においてはこの竹河冒頭文を含む七例が確認される。以下、竹河の冒頭の例を除く、該当箇所を列挙する。

【本文A】

君は、いと口惜しく見つけれぬることと思ひ臥したまへり。内侍は、あさましくおほえければ、落ちとまれる御指貫、帯など、つとめてたてまつれり。
(①紅葉賀・三四四)

【本文B】

駅の長にくしとらする人もありけるを、ましておちとまりぬべくなむおほえける。
(②須磨・二二五)

【本文C】

乳母も、この女君のあはれに思ふやうなるを語らひ人にて、世の慰めにしけり。をさをさ劣らぬ人も、類にふれて迎へ取りてあらすれど、こよなく衰へたる宮仕人などの、巖の中尋ぬるが落ちとまれるなどこそあれ、これはこよなうこめき思ひあがり。

(②濡標・二九五)

【本文D】

落ちとまりてかたはなるべき人の御文ども、「破れば惜し」と思されけるにや、すこしづつ残したまへりけるを、もののついでに御覧じつけて、破らせたまひけるなどするに、かの須磨のころほひ、所どころより奉りたまひけるもある中に、かの御手なるは、ことに結びあはせてぞありける。
(④幻・五四六～五四七)

【本文E】

あらましごとにてだにすらしと思ひたまへりつるを、まいて、いかにめづらかに思し疎まむといと心苦しきにも、すべてはかばかりしき後見なくて落ちとまる身どもの悲しきを思ひつづけたまふ

に、今はとて山に登りたまひし夕の御さまなどただ今の心地して、
いみじく恋しく悲しくおぼえたまふ。

⑤総角・二五二―二五三

【本文F】

「さるべきゆゑあればこそは、さやうにも睦びきこえらるらめ。
などか、今まで、かくもかすめさせたまはざらん」とのたまへば、
「いさや、そのゆゑも、いかなりけんことも思ひわかれはべら
ず、ものはかなきありさまどもにて世に落ちとまりさすらへんと
すらむこととのみ、うしろめたげに思したりしことどもを、ただ
一人かき集めて思ひ知らればべるに、またあいなきことをさへう
ちそへて、人も聞きつたへんこそ、いといとほしかるべけれ」と
のたまふ気色見るに、宮の忍びてものなどのたまひけん人の忍ぶ
草摘みおきたりけるなるべしと見知りぬ。

⑤宿木・四五〇―四五二

以上が竹河を除く「落ちとまる」の用例である。これら六例につい
てその中身を検討しておこう。

まず、本文Aの用例は、紅葉賀巻において光源氏が源典侍と戯れた
末に、慌ててその場を後にした場面に登場する。光源氏の持ち物であ
る指貫や帯などの装束類がその場に「落ちとまれる」と表現されてい
る。ここでの「落ちとまる御指貫、帯など」は、慌てた光源氏が装束
類を持ち帰り忘れたことを表現していることから、「落ちとまる」の
意味としては、「置き去りにされた」とか「後に捨て置かれた」くら
いが適当だろう。

次の用例である本文Bは、大宰大貳一行が上京途中に須磨にいる光
源氏を見舞う場面に出てくる。この場面では五節の君と光源氏とが歌
の贈答を行うが、光源氏からの返歌をうけて、一行から離れて光源氏

のいるこの地に留まりたいという五節の君の心情が語られている。そ
の「留まりたい」という思いが「落ちとまる」という語句を用いて表
現されている。

本文Cは、明石姫君の五十日の祝いの場面において、姫君の女房た
ちについて語られた場面である。落ちぶれてしまつて俗世を離れてし
まいたいと思つていたところ、この家に落ち着いた・定着したとい
う意になる。ここでの「落ちとまる」は、「(ある場所に)居ついた」と
いうような意味を持つていようだろう。

本文Dにみられる「落ちとまる」は後の「人の御文ども」にかかる
表現である。本文Aと同様の表現といつてよい。

本文EとFは「生き残る」の意でとらなくてはならないところだ。
本文Eは八宮と死に別れた大君の悲嘆を描く場面であるが、しっかり
とした後見がない自分たち姉妹の身の憂さを語っている。父八宮との
別離が前提となつて「落ちとまれる」が使用されることになる。一方、本
文Fは、中君が薫に異母妹浮舟の存在を話して聞かせる場面にあたる。
どうしてその存在を早くに教えてくれなかったのか、と問うた薫に対
して、中君が答える言葉の中に「落ちとまり」という表現が出てくる。
父八宮が姉妹の行く末を案じていたことを述べるなかで、姉妹が「世
に落ちとまりさすらへん」と八宮は危惧していたという。八宮は自分
の死後、姉妹がどのように生きていくのかを、橋姫巻以降、心配し続
けていた。また、「世に」という文言が付加されていることから、
死する八宮との対照をなすものとも言える。その点から、ここも「生
き残る」という意味でとらえていくことになる。

なお、『源氏物語』と同時代以前の作品の中で「落ちとまり」とい
う表現を含んでいるのは、次に引く『後撰和歌集』の一例のみである。

【本文G】

ある法師の、源のひとしの朝臣の家にまかりて、数珠のすがり
りを落としけるを、朝に贈るとて

うた、ねの床にとまれる白玉は君がおきける露にやあるらん

返し

かひもなき草の枕におく露の何に消えなで落ちとまりけむ^⑤

「ある法師」が詠んだ返しの歌の中に「落ちとまり」という表現が見られる。この歌は、「ある法師」が、ついうたた寝をして数珠の袋を落としてしまったことをからかう内容の源等の歌に対して、ユーモアたっぷりに「ある法師」が返したものである。「ある法師」は、源等の歌で取り上げられた「露」の語をふまえ、どうして露（すなわち数珠のすがり）を落としてしまったのか、と応じている。この例も本文AやDと同様に、「（その場所に露が）落ちている」というように、物がそこにある状態を示す表現だといえるだろう。

以上、『源氏物語』および『後撰和歌集』に見られる用例を検討してきた。この結果として、たしかに「落ちとまる」という表現は、「生き残る」という意味を有しているといえるが、その一方で、人間の生存ばかりではなく、物が残る・残存するといった意味合いにおいても使用される語句であることが確認できた。そして、それ以上に注意すべきは、そのほかの意味として、人がある場所に滞在する・留まるという意味を「落ちとまる」という表現は有しているという点である。本文BおよびCに見られるように、「（ある場所に）落ち着く・留まる」という意味で使用された例がある。「落ちとまる」という表現の基本的な意味は、人や物がそこに存在する・存在し続けるといった、存続の状態を示すものに過ぎないと考えられる。

特に人の行動について述べる場合、生存を意味する「生き残る」だけでなく「留まる」という生死をふまえない存続の意味があるとする

るとき、竹河の冒頭文における「落ちとまる」を無条件に「生き残る」という解に限定することはためらわれる。生死を問題にしない、単に「留まる」という意味でとらえる余地は十分にあるとみられるのではないか。

この二つの意味のいずれが適当なのかは、これだけでは定めがたいものがあるが、その直後に続く「残る」という語句との関係で絞り込むことができるのではないだろうか。

「落ちとまる」自体に「生き残る」という意味があるとき、「落ちとまり残れる」と表現することには問題が残るように思われる。「落ちとまる」だけで既に十分な意を提示しうるのにもかかわらず、その上でさらに「残れる」が付加されていることの意味がとらえにくいのである。これでは、「残れる」という語句の存在意義が不明瞭になるのではないだろうか。むしろ、もう一つの解である、単なる状態の存続、「留まる」をとり、後に続く「残る」を加味することで「留まり残る」「居残る」とするほうがよいように思われる。

また、そもそも「生き残る」と解釈する本文EやFの場合、「落ちとまり」の直前には「後身」や「世に」という言葉が見え、前述したとおり、文脈上明らかに「生き残る」の意で捉えなければならぬ必然性がある。^⑥このことは、「落ちとまる」の意味が単に存続を表すだけで、それが人の生死や死後を問題にする場面であるから「生き残る」という意味になったということを示していよう。

以上の内容をふまえるならば、竹河巻の冒頭表現中の「落ちとまり残れる」は、「生き残る」ではなく、「居残る」の意でとらえるべきだと考えられる。

三 離反する女房

前節で確認した内容をふまえ、「生き残る」の意ではなく、「居残る」

という存続の意で「落ちとまり残れる」をとるとき、「悪御達」にもさまざまな立場の女房がいたことが想定されることになる。それは大別すると二種類に分けられるだろう。すなわち、「後大殿わたり」に残った者、残らなかった者である。残った者が竹河巻の語り手としての悪御達ということになる。

女房は主家に仕えるものであるが、離反して家を離れる者も少なくない。主家への忠誠心が強いものの代表として乳母や乳母子があげられるとき、その対照的な立場として女房が取り上げられもする。⁽⁷⁾竹河巻に続く橋姫巻以降にも、そうした状況は特に顕著に示されている。以下、八宮家の女房たちの様子を確認しておこう。

八宮家の衰退は橋姫巻の冒頭から明瞭に著されているが、その実態は女房達の動向・言動によって示されることもある。たとえば、次のような箇所である。

年月にそへて宮の内ものさびしくのみなりまさる。さぶらひし人も、たづきなき心地するにえ忍びあへず、次々に、従ひてまかで散りつつ、若君の御乳母も、さる騒ぎにはかばかしき人をしも選りあへたまはざりければ、ほどにつけたる心浅さにて、幼きほどを見棄てたてまつりにければ、ただ宮ぞはぐくみたまふ。

(5)橋姫・一二〇)

引用文は、橋姫巻の序盤に展開する八宮の半生を語る箇所の一節であるが、女房ばかりか乳母までもが家を離反して方々に散っていったとする。離反の主たる要因は、傍線部「たづきなき心地するにえ忍びあへず」とあるように、主家である八宮家に留まっても将来的な発展は望むべくもなく、頼りにならない八宮家での宮仕えには辛抱ができなくなっていくからだという。ここでは乳母も離反をしているが、波線部「はかばかしき人」を選ぶことができなかったからだとい

う理由付けがなされており、乳母や乳母子らは家との関係を継続するのが基本的なあり方なのだと考えられよう。

また、「若き人々の、なだらかにもの聞こゆべきもなく」(5)橋姫・四〇)などのように、八宮家にはしつかりとした女房がいなくてもたびたび示されているが、これは単に女房の質の問題だけではなく、その前提として、離反した女房たちが大勢いたことによる結果なのだと見ることもできる。

以上の例に見られるがごとく、明確に女房の離反を示すような例だけではなく、暗に女房の離反をほのめかすような記述も見受けられる。その点からすれば、女房に関する記述は家の状態を如実に表す一つの物差しであるとも言えるだろう。もちろん正編の中にも、こうした離反する女房は描かれているが、橋姫巻以降の宇治八宮家はかなり集中的に家の窮乏・衰退を女房のあり方や不在に絡めて語っている。このような女房不在の状況は、やはり家の発展の可能性が薄れ、衰退の兆しが見られるとき、女房たち自身の意思や選択によって現出するものだといえるだろう。あるいは総角巻あたりにまで物語が展開していくと、大君と薫の結婚を切望し、大君を追いつめていく女房がたびたび描かれるが、彼らが結婚を推し進めようとする理由には、経済的保障の問題が頭にちらついていたと思しい。こうした女房たちの思いというの一般的なものである。薫が大君との結婚実現のために弁に助力を請う場面では、一般論としての女房のありようが、「例の、わろびたる女ばらなどは、かかること(男女の結婚に関連する話題)には憎きさかしらも言ひませて言よがりなどもするを」(5)総角・二二八)といったように語られてもいる。女房は主人のよりよい結婚を望む。それが自身や自身の家の発展に結びつくものだからだ。それゆえに差し出がましい態度を取る者もいるということなのだろう。女房たちの功利的な側面が窺える。

こうしたことをふまえると、鬚黒・玉鬘家においても八宮家と同様

の状況、すなわち女房の離反が生じていたとしても何ら不自然ではない。もちろん、それは竹河の巻で悪御達によつて語られた物語内の時間よりも後の話である。悪御達の語った内容においては、それが予見されるといふような描かれ方になっている。

(玉鬘は)「見苦しの君たちの、世の中を心のままにおごりて。官位をば何とも思はず過ぐしますがらふや。故殿おはせましかば、ここのなる人々も、かかるすさびごとにぞ、心は乱らまし」とうち泣きたまふ。右兵衛督、右大弁にて、みな非参議なるを愁はしと思へり。侍従と聞こゆめりしぞ、このころ頭中将と聞こゆめる。年齢のほどはかたはならねど、人に後ると嘆きたまへり。宰相は、とかくつきづきしく。

(5)竹河・一一一―一二三

引用箇所は竹河巻の巻末にみられる。鬚黒・玉鬘家の子弟の昇進がかんばしくないと玉鬘の悲嘆が語られるこの場面からは、その後の家の不振が予見されよう。そして、そうした家の不振は確かに起こったようだ。宇治十帖においては、玉鬘家が問題にされることはもはやないのである。その点に鑑みれば、玉鬘家は没落していったと考えて差し支えはないだろう。そして、その過程において、女房の離反が生じてくる余地は十分に考えられるのである。

ここまでの本稿の流れに沿って考えるならば、語り手としての悪御達は家の衰退後にも引き続き主家に仕え続けたわけだが、その一方で離反する女房たちも存在したということになる。この離反する女房たちの存在が確認できるような文言として「落ちとまり残れる」があるとするとき、この箇所は大きな意味を持つように思われる。というのも、離反した女房たちは家の衰退を見極め、自らの利益となるところは少ないと判断し、主家を見限って出て行ったものと思しいが、その一方で家に残り、仕え続けた語り手悪御達は、主家に対してある程

度の忠誠心を持ちえていたということも考えられるからだ。もつとも、家に残った理由が必ずしも忠誠心のみよるものだとはい断しかねるところはある。柏木の死後、西海を流浪した後に八宮家に仕えることとなった弁のように、諸事情から必ずしも経済的に恵まれた宮仕え先を見つけることができなかつた者もいるだろうからだ。また、他家に頼るべき縁故がまつたくなかつた者もいたかもしれない。その点からすれば、忠誠心のみを問題にすることはできないものの、主家が抱える不満を共有することはできたはずである。玉鬘・鬚黒家が抱える家の不振は、家に残り続けた者たちの不満に直接的に結びつくはずだからである。そうした不満が悪御達の語りの原点であると考えられることができるだろう。

四 異議申し立ての語り

前節の末尾で、家に残り続けた悪御達の不満が、竹河巻の語りの原点であると述べた。このことについては、前稿『源氏物語』竹河巻冒頭表現考⁹⁾において検討した事項を前提としている。詳細は当該論文に譲ることとするが、その概要だけここに示しておく。

前稿では、竹河巻頭の序文の解釈を主たる問題とし、とりわけ「離れたまへりし」という表現について検討した。拙論では、この表現は玉鬘家と六条院家や紅梅大納言家との血縁関係の遠さを示すものではなく、むしろその親疎関係において、疎隔・乖離というような意味を持つものだと述べた。

そうした見解に立ちつつ、玉鬘家と六条院家の疎隔・乖離の時期を見定めるとき、それは竹河の巻内で進んでいくものであるとした。両家の関係の崩壊は元からあつたのではなく、竹河巻の内部で展開されるものであり、その物語内世界の時間から遠く隔たつたところで、編集の立場に立つものが匂兵部卿巻や紅梅巻との関係をほのめかしなが

ら序文のかたちで述べたのだと考えた。

こうとらえるとき、しばしば巻頭の表現において問題になる「ひが事」の意味は、この両家の疎隔・乖離にからんだものなのではないかと述べた。光源氏死後の世界における六条院家のあり方を、悪御達の語りは明るみにしている。具体的には、光源氏の遺言である玉鬘厚遇を果たすことをしなかった夕霧の姿を露わに語っているということだ。このことは、匂兵部卿巻で語られた光源氏を尊重する夕霧の態度とのズレを示すもので、光源氏の意に反して玉鬘を排除していく夕霧を竹河巻で悪御達は語っている。光源氏の意向に沿っているかのような語られ方をした夕霧について、その内実を暴露するような語りが悪御達の語りだとした。つまり、「ひが事」の意味とは、「紫のゆかり」によって語られた光源氏を尊重する夕霧の姿に対する異議申し立てであり、このことが語られることによって、光源氏という存在やその影響力の翳りまでも明るみにするものだったのではないかと考えた。以上が、前稿の概要である。

本稿においても、基本的な考え方は変わらず、この方向性で検討していく。

本稿で取り上げた「落ちとまり残れる」という表現が、従来考えられてきた「生き残る」という意味ではなく、「居残る」という表現だとするとき、悪御達は没落していく家に何らかの理由で留まり続けたことになる。その理由が主家への忠誠心という積極的なもののなか、あるいは行き場を失ったためという消極的なもののかは定めがたいものがあるが、いずれにしろ没落する主家とともに不如意な余生を強いられたことは想像に難くない。退廃していく主家のありようとともに、その家に仕える者の境遇も、それまでの華やかなものから徐々に翳りを見せたことだろう。そうした中で、彼らの心の中に憤懣が生じるのは、ごく自然な成り行きだと言えるだろう。その憤懣の矛先は、前述したとおり、夕霧をはじめとする六条院家に向けられたというこ

となる。「紫のゆかり」の語ったという六条院家の美談ともいべき光源氏尊重の物語に接したことが悪御達の語りを呼び起こす原動力になったのだとみる。栄華を謳歌する六条院家の人々の陰に、自分たちを追いついていく行為があったことを彼らは語ろうとしたのではないだろうか。

五 おわりに

以上、竹河巻冒頭の序文にみられる「落ちとまり残れる」という表現の解釈と、そこからの発展として悪御達の語りの原点・原動力について考察してきた。この冒頭文における「落ちとまり残れる」という表現が「生き残る」という意味ではなく、「居残る」という意味であると考えるとき、そこには悪御達という語り手の背景が見え隠れすることになる。退廃へと向かう主家とともに苦境を耐え忍んできた彼らは、「紫のゆかり」の語りに接したとき、その反論を試みた。六条院家の栄華の背後には、自分たちの不遇があり、その不遇は六条院家の仕打ちによるものなのだという憤懣の語りである。

悪御達の不満が募っていったことは、没落貴族の家の状況に鑑みても十分に理解ができることであるが、悪御達が語った内容そのものが真実の暴露なのか、それともある程度の捏造や誇張が含まれているのかは定めがたいところもある。こうしたことが問題になるのは、竹河巻の冒頭文の末尾に「いづれかはまことならむ」という表現が組み込まれているからである。しかし、悪御達と「紫のゆかり」のどちらの言い分が正しいのかということは、さほど大きな問題ではないようにも思われる。物語には「いづれかはまことならむ」とあるだけで、答えを提示するつもりはないようにも見えるからだ。むしろ、表現に則して、おぼろげになっていることそのものを読み取る必要があるのではないだろうか。そのような立場でこの表現を捉えるならば、光源氏

の遺志を夕霧は引き継いだ、あるいはそれに反する行為をとった、というそれぞれの言い分のいずれが正しいのかは判断できないとするなかで、この問題に前もって巻頭で終止符を打ったのだとみることができる。光源氏死後、遺された人々（特に六条院家の人々）が光源氏に對してどのような念を抱いているのか、それさえもはや不明瞭な時代に移行しつつあることをこの表現は示しているように思われる。

注

- (1) 古注以来、「ひが事」とは、冷泉院や薫の出生問題の真偽をめぐるものという見解は数多く見られる。しかし、それが妥当な解釈であるというものにはなっていないことは、その後の研究史を見てもしばしば指摘のあるところである。そうした先行研究については齋藤弘康「『竹河』の語り手」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識 匂兵部卿・紅梅・竹河』至文堂・平成十六年）において詳しくまとめられている。なお、それによれば、結局はこの「ひが言」という語の意味は判然としないものとされている。

- (2) 拙稿「『源氏物語』竹河巻冒頭表現考——切り捨てられる玉鬘一家と形骸化する光源氏の意志——」（『千葉経済大学短期大学部研究紀要』五・平成二十一年三月）。

- (3) 『源氏物語』本文の引用はすべて小学館『日本古典文学全集』『源氏物語』に拠る。なお、引用する際には、末尾に巻数・巻名・掲載ページ数を括弧付きで付す。

- (4) 日本古典文学大系『源氏物語 四』（岩波書店）、新潮日本古典集成『源氏物語 六』（新潮社）、玉上琢彌『源氏物語評釈 九』（角川書店）、新編日本古典文学全集『源氏物語 五』（小学館）、『源氏物語の鑑賞と基礎知識 匂兵部卿・紅梅・竹河』（至文堂）を参照。

- (5) 本文は日本古典文学大系『後撰和歌集』（岩波書店）に拠る。引用部は雑四・一二八六―一二八五番歌。

- (6) 「落ちとまる」の類似表現には「落ちとどまる」（浮舟巻に一例のみ）、「残りとまる」（行幸巻、藤裏葉巻、若菜上巻、若菜下巻に各一例）、「残りとどまる」（玉鬘巻、若菜上巻に各一例）がある。
このうち、「生き残る」の意でとれるものは、浮舟巻の「（文が）落ちとどま

りて、人の御ためもいとほしからむ」（⑥浮舟・一八六）以外の次の用例である。

「老ひの身の残りとどまる」（③玉鬘・一〇九）、「この世に恨み残ることもはべらず、女宮たちのあまた残りとどまる行く先を思ひやるなむ、さらぬ別れにも絆なりぬべかりける」（④若菜上・二〇）、「さべき人々にもたち後れ、世の末に残りとまれるたぐひを」（③行幸・二九八）、「こよなく思ひ消ちたりし人（葵上）も嘆き負ふやうにて亡くなりなき」と、そのほどのたまひ消ちて、残りとまれる人（夕霧）の、中將はかくただ人にて、わづかになりのぼるめり」（③藤裏葉・四四六―四四七）、「院の御代の残り少しとて、ここにはまたいくばく立ち後れたてまつるべしとてか、その御後見のことをば承けとりきこえむ。げに次第をあやまたぬにて、いましばしのほども残りとまる限りあらば」（④若菜上・三九）、「思ふ人にさまざま後れ、残りとまれる」（若菜下・二〇六）。

これらの表現も、いずれも人の生死や後見を問題にした場面に出てくることをふまえて、「生き残る」という意味になっている。

- (7) 吉海直人『平安朝の乳母たち』『源氏物語』への階梯（世界思想社・一九九五年九月）。

- (8) たとえば、末摘花の乳母子である小侍従。

- (9) 前掲注（2）参照。